舟　は　スローライフ・持続可能社会　の　先進役　　2024 年 9 月

お 江 戸 舟 遊 び 瓦 版 1053 号

水彩都市江東　　こころ美しい日本の再生　　安全・安心まちづくり

お江戸観光エコシティ・お江戸舟遊びの会　　江東区千田 13-10

原口侑子「ぶらり世界裁判放浪記」幻冬舎 24.7.5

序章　旅の始まり　バングラデシュ人民共和国

南アジアもアフリカも、中南米も太平洋諸国も「南」の国として、「先進国」と「途上国」の二項対立で観ていたが、学生時代バックパックを背負ってトルコから中東を回り、インドを経て、東南アジアまで南下したとき、こんなちんけな二項対立では、私が目にするものの何も一般化できないということが、うすうす分かり始めた。

その後弁護士になった私が、法律事務所を辞めてバングラデシュに行ったのは、逃避と好奇心、バックパッカー的な思考回路が復活したせいでもあった。首都のダッカで 1 年半を過ごした。初めに立ち上げる予定のプロジェクトは頓挫し、法律の調査をしながら暮らしていた。

バングラデッシュは独立してから 50 年と若く、東パキスタン時代を終らせた「独立戦争の英雄たち」は、日本の団塊の世代、国をつくったという自信をもって政官財界を回している。保守的なイメージのあるイスラム教国で女性 2 人が交代で首相を務める男尊女卑を上回る意外性の国だ。

1章　アフリカ　エチオピア連邦民主共和国、ケニア共和国、マラウイ共和国、タンザニア連合共和国、ルワンダ共和国、ブルンジ共和国、エスワティニ王国（旧スワジランド）、ナミビア共和国

エチオピア連邦民主共和国：傍聴席は 4 列。法壇の前には大きな机があり、弁護人か裁判所の職員かが、裁判官の方を向いて座っている。日本では一人ひとり法廷に入って来るが、拘置所からくる被告人は腰縄と手錠をつけられている。その昔、政府高官が『日本化』と言って、日本を手本にした制度を作ろうとしていた時期があるという。日本もエチオピアも、帝国主義時代に植民地化されなかった国ということが要因のようだ。エチオピアでは、19710 年代から 1990 年代にかけて幾度も戦争が起こり、100 万人の難民を生んでいる。

ケニア共和国：古今東西、裁判所のイメージは「怖いところ」「特別な場所」だ。最高裁判所に行くと扉もひときわ重かった。テリッテリの法壇の木の艶も凄ければ、5 人の裁判官も重厚感があった。女性の裁判官が穏やかな声に、眼光、クリアな言葉で鮮やかに見えた。案内人が「この裁判官は弁護士から政治家になった最高裁裁判官でとても有名で、彼女の裁判を見れてラッキー」と。

ナミビア共和国：アフリカの法制度は、歴史を追っていくと 4 層になっていると言われる。

1 層目が口頭で伝わる伝統法。今も慣例法として重要な位置を占める。2 層目が宗教法。主にイスラム法。3 層目が植民地時代のヨーロッパ法。4 層目として独立後に整備された法である。

2 章　ヨーロッパ　　フランス共和国、イタリア共和国、トルコ共和国、ブルガリア共和国

トルコ共和国：トルコは東洋と西洋の交差点とよく言われる。私は日本の弁護士で、各国の裁判を傍聴するのが趣味で傍聴したいと聞いてみると、第 16 法廷に入れてくれた。オスマン帝国時代、トルコには通常の裁判所とイスラム法の裁判所が並立していた法多元主義の国だった。オスマン帝国主義が滅亡して近代化の時に、ヨーロッパのローマ・ゲルマン系の法律で世俗化された。

2019 年には、エルドアン大統領の下で法制度改革を宣言した。

裁判所を出てオレンジジュースを買った。オレンジが豊富にあり、酒を飲まず、水分補給には中東のシリアやヨルダンでは、まちの至る所に果物ジュースの屋台があり、橙色が鮮やかだった。

ブルガリア共和国：ヨーグルトのイメージが強いブルガリだが、実は古い国だ。トラキアは 4000 年

前の文明と言われている。19 世紀後半、露土戦争後に自治公国として独立し、20 世紀になると1944 年にソ連の侵攻を受けて衛星国となり、1989 年まで共産主義体制だった。裁判所を出ると、大聖堂もレストランも誰かが苦労して作って、同じように人々が歴史を振りまいていくという事実が明滅していた。

3 章　BRICS　ブラジル連邦共和国、ロシア連邦、インド共和国、中華人民共和国、南アフリカ共和国

ブラジル連邦共和国：ブラジルは広く、4 カ月かけて町を回った。首都ブラジリアは、乾いた荒野にたった3年で建設された世界最大級の未来都市であった。しかし、周りの衛星都市との所得格差が大きく、上級国民しか住めない場所という。最高裁の裁判はいつでも見ることができ、法廷はテレビ中継している。日本では注目の裁判は並んで傍聴券の抽選を待ち、注目の裁判は直接目にすることは少なく、判決は結果だけ伝えられ、背景や文脈をそぎ落とした報道が出回るのと大差がある。ブラジルは裁判が多い国で、2014 年に記録は全面的に電子化されている。それに比較し日本の紙証拠偏重主義は恐るべきものだ。ブラジルでは、裁判所は身近で、それは「皆が見ているから」であった。

インド共和国：大都市ムンバイは 4 車線の道路を渡れなくて 15 分待ったこともある。そこから一歩入った路地裏はスラムで、路傍にはたくさんの人がごろごろと転がっていた。ビハールは仏陀が悟りを開いた聖地なのに貧しかった。仏教はインドで興り、東進し、インドではついえたのだと思わされた。インドの国土は、ヨーロッパのＥＵ圏とそう広さは変わらない。

　カーストに基づく差別は酷く、最下層のダリットは法律上指定カーストとされている。1965 年多くのダリットが仏教に改宗し、50 万とも 70 万とも言われている。インドの人々は、拠って立つものがある世界観のなかで何千年も生きてきた。指導者のアンペードカルは、数ある宗教の中で、平等意識が強く、国際的な連帯のある仏教を選んだと説明する。中南部や南部ではキリスト教やイスラム教への改宗が多い。

南アフリカ共和国：アパルトヘイトは権力者による人種差別だっただけではない。

4 章　**島国**　　アメリカ合衆国、サモア独立国、フィジー共和国、ニュージーランド、トンガ王国

アメリカ合衆国：日本人が初めてハワイに入植したのは 1868 年、150 年以上も前だ。

フィジー共和国：サモアと「青いサンゴ礁」で有名なフィジーの距離はフライト時間で 1 時間 50 分ほど。サモアは地理区分上、ポリネシアで、フィジーはメラネシアに分けられる。フィジーに昔から住む人は肌の色が濃く、髪はアフロの人が多く、インド系住民が多い。

ニュージーランド：第 8 法廷の傍聴席は 2 列しかない。被告人の女性は裁判官の質問に対して激しい剣幕で怒鳴った。裁判官は被告人に対して「あなたはドラッグとアルコールを使用し、それを反省していないようですね」と厳しく言った。ニュージーランドは、つい革新的なイメージを持ってしまう。女性の選挙権が認められたのは世界で一番早く、同性婚が法制化されているが、裁判所でのメモは禁止されていた。

終章　旅は続く　マサイランド（ケニア）、東京（日本）、ロンドン（イギリス）

ロンドン：「東アフリカのケニアと日本の比較研究をしたいのだ」というと、日本では「？」という反応をされる。私が今ロンドンで法人類学の研究をしているのは、悲しいかな植民地時代の名残で文献が多く残るイギリスで、「西洋」の「個人の人権」をてこに、慣習という青リンゴと社会通念という赤リンゴを食べたいからで、旅をしたアフリカ 30 ヵ国の中でケニアを選んで日本と比較しているのは、最初にかじったマサイのリンゴの酸っぱさが忘れないからだ。

所感：　凄い本に出合った。弁護士事務所を辞め、ぶらりと世界裁判所巡りを始めたというのだ。

「先進国」と「途上国」の二項対立的思考の脱皮を抜本的に分析しようとしているようだ。

著者は、緊急災害医療専門家として、3・11 時の東電福島第一発電所や、オームのサリン事件で現場に入った原口義座氏の子息である。この父にしてこの娘ありと感じさせられる。

　若い人が世界を歩き、本当の平和な世界をどう作るべきかを考えている感がある。中味の紹介にはなっていない、是非本書を手に取って味わっていただければと思う。　（文責　中瀬）